今、私にできること

櫛原中学校　３年　藤井　優華

チルドレン・オブ・デフ・アダルツ。英単語の頭文字をとって、コーダといいます。コーダとは、耳が聴こえない親のもとで育った、聞こえる子どものことです。

私は、ある新聞の切り抜きを思い出しました。２０２２年１１月の記事に、聞こえるＫさんと、難聴である両親との生活が書かれていました。私は、もっと知りたいと母に伝え、Ｋさんと連絡を取ってもらい、インタビューさせていただくことができました。

「藤井優華です。よろしくお願いします。ご両親が難聴であることで苦労したことはありますか。」

「親戚の集まりが嫌でした。なぜなら、いつも呼び出されて、親の耳がわりをしないといけなかったからです。結婚式や葬式にも呼ばれ、難しい単語も手話通訳していました。昔、国が手話を禁止した時代もあって、両親は口の動きを読む口話教育で育てられました。そのせいで、文字の読み書きができず、筆談で会話することもできませんでした。」

「ご両親のことで、友達にからかわれたり、いじめられたりしたことはありませんでしたか。」

「両親の耳のことを知ってほしくて、自宅に呼んだり、クラス替えのたびにみんなに話したりしたので大丈夫でした。でも、私のことを嫌がる人はいて、いじめられたこともありました。」

「いじめられたことを、ご両親に話しましたか。」

「話しませんでした。話しても何かが変わるわけでもなかったからです。だけど、一つ上の姉が助けてくれました。」

「普通の家に生まれたかったですか。」

「物心がついた時には手話が当たり前で、それが普通だったので、あまり思わなかったです。父は四人兄弟で、自分だけ耳が聞こえなくて、小学校から寮に入れられました。父は家族の愛を受けずに育ったので、その分、幸せにしてあげたいと思いました。」

「Ｋさんは、耳が聞こえてよかったですか。」

「うーん。それが分からなくてね。耳が聞こえないほうが楽だったと思ったこともあったけれど、今は両親の役に立っていると思うので、聞こえてよかったと思います。」

「親戚などの援助はありましたか。」

「親戚のことが嫌いだったので、なかったです。でも、両親が困らないように、日頃から近所や地域の方と密な関係を築くようにしました。昔は差別されることも多い時代で、『障害のある親の子供は……』と言われがちでした。だから親が馬鹿にされないように、立派に堂々と生きるんだと、意地もありました。」

「最後の質問になりますが、コーダの人に伝えたいことはありますか。」

「声掛けや手助けをしてくださる方はいるので、困ったときは勇気を出して、思いを伝えてほしいと思います。」

こうして、二時間半のインタビューはあっという間に終わり、Ｋさんにお礼を言ったとき、「学校帰りで疲れているのに、こちらこそありがとう。発表してもらえることで、たくさんの人に知ってもらえて嬉しいです。」と、笑顔で話してくださいました。

それから私は、本でも調べてみました。親を頼ってはいけないと、悩みを胸にしまい込む人や、視線が嫌で手話を使わない人、『大変だね。両親をしっかり支えてね。』と同情されることもプレッシャーになって苦しんだと書かれていました。

私は、インタビューや本を読んで、Ｋさんがご両親を幸せにするために、力強く生きる姿にとても感動しました。私だったら、両親の障害のことを隠して、手話も人前ではしなかったと思います。

現在、手話は手話言語として認定されています。私は手話が当たり前になって、周りからジロジロとみられることがないようになればいいなと思います。

そして今、私にできること。それは、こうして一人でも多くの人にコーダの存在を知ってもらうために伝えることです。また、手話を覚えて、コーダの人や聴覚に障害のある人を支えられる人になりたいです。